

金史良文学に現れた白々教事件の影

——「土城廓」・「太白山脈」・「海への歌」を中心に——

南 富 鎮

一

一九四〇年七月、『文芸』に発表された金史良「草深し」は、植民地期の朝鮮全土を震撼させた白々教事件に触発されて書かれたものである。前代未聞の残虐で陰惨極まったこの事件は、一九三七年二月に発覚され、一九四〇年三月には京城地方法院の大法廷で公判が開かれる。そして、その公判記録と論告文は朝鮮語雑誌『朝光』の一九四〇年五月号に全文掲載される。「草深し」には、『朝光』の白々教公判記録から思い起こされる事件の痛ましい記憶が綴られており、朝鮮の民衆を喰い物にしていく白々教への憤りと、迷信がはびこる植民地の現実への怒りが露になっている。そして、白々教事件をきっかけに、金史良の描く朝鮮の類似宗教への態度は一変していく。とくに白々教の母胎である東学系類似宗教を描く際にそれが顕著に現れる。¹ 本稿は、白々教事件が金史良文学にどのような影を落としたかを、「草深し」の前後作を中心に、東学類似宗教への認識の変遷過程から考察する。

二

東学系類似宗教のことが金史良文学に最初に登場するのは、佐賀高等学校二年次（一九三四年）に書いた「山寺吟」である。その冒頭には、「上帝教の暢気な村の老人達」が、鄭道令や鶏龍山、都邑処について話す場面があり、東学教と密接な関連のある言葉が散見される。しかし、作品全体はあくまでもロマン스에満ちた青春の一面を描いたもので、類似宗教への陰鬱な描写はあまりなされていない。あくまでも上帝教が一つの周縁的な素材として登場しているだけである。上帝教に関する本格的な記述は、「山寺吟」と同じく、佐賀高等学校二年次に書かれ、後の一九三六年『堤防』二号に発表された「土城廓」の中から見ることができ²る。

「土城廓」は平壤郊外の貧民窟土城廓で暮らす浮浪労働者たちの悲惨な生活を描いたもので、その支械軍（苦力）の中に吃男の上帝教信者が出てくる。彼は日清戦争で家族と兄弟が殺され、彼自身は密酒のかどで長い間留置され、罰金として牛と家

財道具まで奪われたのち、土城廓に流れてきた人である。そして作品はこの上帝教信者の口を借りて植民地政策の矛盾が痛烈に批判されているが、そこにはすでに、彼が信じている上帝教についての次のような細かい描写が見られる。

例の吃男は踞坐して何か奇妙な呪文をぶつぶつ唱へてゐるばかり、返事もくれぬのだ。爺が吃男の土幕の中を覗いたのはそれが始めてだつた。薄暗い所に石油箱の祭壇がおかれ、その上に清水の器をおいてゐた。彼は今尚、上帝教の信者だつた。かうして上帝の靈に触れ、今に地上天国が建設されればその時こそ自分には厚授あるものと信じてゐた。

「お前さん、何してるだよ」

「叫哆叫哆太乙天上元君……」吃男は依然として奇妙な呪言を止めなかつた。

上帝教は一九二五年、東学教第二世教主權時亨の直弟金演局が創設したものである。彼は、梁山通道寺奥の千聖山に入山して瞑想修道するうち、上帝から紅書一冊を授けられ、世界万国の宗教は上帝に基づくものと大いに悟り、忠清南道鷄龍山新都内にその布教活動の拠点を設置する。その教理の根本は、以前の東学教や天道教のままであるが、細部においては「天道教では祈祷礼拝に際し、清水を供へるのみにて神位を設けなが、上帝教では恒常祀堂（天壇）の設けあり其処に神位を安置」したといふ。そのような模様は本文中からも確認でき、また本文

中の「厚授」があるという表現は、当時の東学類似宗教に幅広く見られる募金活動の常套的な手段の一つである。植民地時代の悲惨な現実にあえぐ民衆の心理を旨く利用し、金銭を巻き上げる手口で、その最たるものが、「草深し」以降に登場することになる白々教なのである。

しかしながら、「土城廓」から見るかぎり、この時期においての東学系類似宗教への認識は、後の「草深し」やそれ以降の作品から見られるような激しい批判は見当たらない。「山谷の手帳」では田舎の閑閑な風景描写の素材として取り入れており、「土城廓」の上帝教信者の吃男を通しては、植民地の悲惨な現実を浮き彫りにしている。類似宗教への批判より、むしろ信者である吃男へのあつい同情が見受けられる。こういう類似宗教への好意的な認識は、白々教事件がまだ発覚されていないからであろう。しかし、白々教事件が明るみに出てまもなく書かれた「草深し」になると、その態度は判然と変わる。一九三七年二月に発覚した白々教事件によつて、類似宗教への好意的イメージが急転換し、嫌悪と怒りの対象になっていく。そういう嫌悪と怒りを最も露にしたのが、白々教事件の公判に刺激されて書かれた「草深し」である。「草深し」では作中の主人公による白々教批判だけではなく、作者の感想の形を借りてもさらなる激しい批判が加えられている。このような白々教事件に対する嫌悪と批判の姿勢は、東学教や東学系類似宗教全体へ広がり、以後の作品にさまざまな形でその影を落とすことになる。それが明確に現れているのが長編小説「太白山脈」である。

さて、ここで一つ指摘しておきたいのは、本文中に見られる

上帝教の呪文の誤りのことである。本文の「叫哆叫哆太乙天上

元君」に始まる呪文は、上帝教の呪文ではなく、東学のもう一つの傍系である甌山教系の呪文なのである。甌山教は一九〇四年頃姜一淳（号が甌山）によって創始されたもので、東学系類似宗教と区分して叫哆系類似宗教と言われている。その呪文が、「叫哆叫哆太乙天上元君……」と始まるから、一般的に略して叫哆教、または太乙教とも言われ、その呪文のことは太乙神呪、または如意呪ともいう。この太乙神呪は、東学教時代からのものである侍天呪に甌山教主姜一淳が新たに作り加えたもので、おもに叫哆系類似宗教によって広く用いられた。その呪文は「叫哆叫哆太乙天上元君叫哆嘯都来叫哩喊哩婆娑啊」というようなもので、本文からもその一部が見受けられる。しかし、本文の上帝教は東学教系であるから、太乙神呪ではなく、侍天呪（至氣今至願為大降、侍天主造化定永世不忘万事知）を唱えたはずである。叫哆系類似宗教が上帝を重んじて、上帝という言葉をよく使うことから、作者はこの呪文のことを上帝教のものと勘違いしたのではないかと思われる。さらに、本文（『文芸首都』一九四〇年二月）では、「叫哆叫哆」と書かれるべきところが「叫哆叫哆」になっており、これが全集では「哇哆哇哆」に変わっている。これらの誤植は、後の作品集にもそのまま引き継がれ、北朝鮮の翻訳版やそれを本にした韓国版では、この誤植の部分がそのまま朝鮮語音読みになって全く間違った形になっている。一つの事実として指摘しておく。

三

「太白山脈」は戦時期朝鮮の御用雑誌『国民文学』一九四三年二月号から十月号にかけて連載された長編小説である。太白山脈の山奥の火田民村を背景にし、甲申政変に敗れて逃れてきた尹天一父子が火田民を理想郷に導く過程の苦難の話で、その苦難の中心部分をなしているのが東学教徒との確執である。そして、作品では東学教徒たちが太白山脈の山の中に分教所を建て、呪符や呪文、予言などで火田民をたぶらかし、金銭と処女供養を強要する集団として描かれている。

彼は中の方で奇怪な呪文を唱へてゐる聞き覚えぬ男達の声を耳にして、いよいよあの憎むべき魔教の連中が乗り込んで来たなと思つた。その戸口の方を見ると、壁に黒字で書いた次のやうな呪符がはりつけてある。（呪符の絵と本文一部省略）その当時は妖書「鄭鑑録」のたわいない予言を利用して簾生したいろいろな邪教が、可憐不遇な農民村の中に魔手を伸ばして、政府は今に倒れ、教主が登極して政治をとるやうになる、その暁は教徒達にも厚授あるものと愚昧な民衆をたぶらかしてゐた。しかも教の目的成るの日までには、必ずこの地上に水乱と火乱に厄が現はれる故に、今の中教主の指図に従つて江原道は金剛山の麓に集まらねば生命と財産も全うし得ないと云つて、無智な教徒達を太白山脈へと追ひたてた。

水乱と火乱、教主の登極際の厚授と避身宮としての金剛山などの概念は、「近い将来に火の審判、水の審判」があり、「教徒は献金、手腕、信仰の程度によって官爵が与えられ」安楽な生活が得られるという白々教の犯罪記録と全く重なっている。また、農民を地方の分教所に火田民として住まわせたことや、容貌の綺麗な信者の娘を侍女として献上させ、教主の妾にしたことなども白々教事件そのままである。分教所からきた三人の教徒達が皆「白いものを着込ん」でいること、農民を襲って「何でもかでも掠奪するだし、女は強奪する、男達は打ち殺す」といったところも白々教事件の影響であろう。

このように、「太白山脈」では東学教を描く際に、白々教事件の影がつよく投影され、東学のイメージはほとんど否定的に描かれている。そのためか、作品の時代背景になっている一八八六年頃の東学の像は、実際のそれとは全く懸け離れている。

一八八六年頃の東学は、まだ草創期の穏やかな救民思想と改革思想を唱えており、本格的な実力行使をする一八九二年の教祖仲寛運動や一八九四年の東学農民運動にいたる前の段階で、民衆は東学に対して穏やかな希望を抱いていた。本文のような悪事を働く集団としては、農民の支持を得るはずもなく、実際にもそうではなかった。さらに本文中には、「東学の流れを汲むと称する教徒」や「東学を名乗る邪教」という表現がよく出ているが、「東学の流れを汲む」邪教や類似宗教の誕生は東学農民運動が失敗した後のことで、作品の時代背景としては合わない。ほかに、東学に対する細かい描写には後代の類似宗教、つまり白々教の影が強く投影されている。

一方、本文では、東学が勃興した歴史的背景や教祖崔濟愚の思想についてふれた箇所があるが、そこでは、「世を救ひ、民を安んじ、奸權を除かねばならぬ」といったように、その思想を高く評価しながらも、結局は「又無頼の徒はこの教を悪用して、山間には或は田村に入り、愚昧な民衆を籠絡し、無慙至極にもその生活を蹂躪した」という認識に至っている。主人公尹天一が東学教徒と一戦を交えるのも、東学のこういう誇張された否定的な一面からである。しかし、本文でなされている邪教への批判は、東学の流れをくむ類似宗教に限られており、在来の自然信仰や山神信仰などには全くなされていない。主人公尹天一が山神に祈って将来の導きを乞うことや、新天地に着いて山の神に祝福の祈りをあげる場面からみるように、在来の自然信仰は非常に好意的に描かれている。これらの自然信仰は邪教に對抗し、新天地と新国家思想を支える精神の支柱としての役割をえしている。山神をはじめ在来の自然宗教へのこのような描き方は、日本神道からの影響を思わせるが、それはともかく、金史良の類似宗教への嫌悪感は、あくまでも東学系類似宗教に限られたものといえる。

しかし、作品の終わり近くになると、東学への認識は、変ずる。月精寺の老僧に東学の政治的な意義を論されたからである。それは今までの邪教的な面ではなく、国家建設の指導的な一面である。

「老婆心から、拙僧もう一つ注意したいことがある。学者の目童様がゐるから、あの東学のこともよく知らうのう。」

東学党こそ今この国における最大の力ぢや。各地に目を追ふてさかる民擾、それも凡て官府の暴虐に反抗せる乱民を、東学が陰で指導してゐる。これが今に一大勢力となつて、この国の政治を動かす時が必ず来るであらう。それに目をつけるがいい。これともよく結んで力を合はせ、国家改革の発砲とすべきぢやぞ。(後略)」

作品の流れから見ると、ほとんど唐突といえるほど新しい東学像である。今まで呪術面だけが強調されて描かれた否定的な東学の認識に、政治的な力という肯定的な一面が加わつたのである。作品でのごような東学像の変化は、作品の後半の終わり近くになつて、しかも唐突なたちでなされており、作品構造上の疑問さえ抱かせる。東学の邪教性ばかりを強調したそれ以前とは違つて、いきなり政治的な力を評価するなど、肯定的にその認識が急変しているからである。このような東学に対する認識の急変は、この時点において金史良の東学認識に大きな変化があつたことを示すものであらう。長い時間を要求し、読者の反応にも気をつかう新聞連載小説の性格もあり、白々教事件当初の衝撃からある程度冷静さを取り戻したとき、以前の東学像に修正を加えざるを得ない必要が生じたように思われる。そのため、作品全体においては東学像の不統一という構造上の問題を残すことになつたであらう。そして、このように一部肯定的に変化した東学像は、後の長編連載小説「海への歌」ではさらなる変容を見せる。

四

「海への歌」は、朝鮮の『毎日新報』に一九四三年十二月から一九四四年十月までに連載された長編小説である。内容は申別將一家の約一世紀にわたる苦難の話で、アメリカのシャーマン号進入事件から、東学農民戦争、日韓合併と満州事変、日中戦争を経て太平洋戦争に至るまでの広大な歴史的なドラマが申別將一家の三代にわたつて繰り広げられている。しかし、その思想においては、日本の朝鮮統治を一方的に肯定するもので、日本統治を賛美し正当化する姿勢で貫かれている。そのため、登場人物の性格は統一されておらず、しばしば分裂を起こして作品自体も破綻しているように思われる。たとえば、主人公の申別將は、外国侵略勢力と戦うことに命を惜しまぬ人物で、シャーマン号侵入の時には国を守るため大活躍するが、江華島条約につづく日本の侵略に対しては、いつの間にか肯定的に受け入れる。そして日清戦争になると、今度は「大東亜」が力をあわせて「洋鬼子」を退くことを力説しながら、いきなり日本軍と協力して清国と戦つたりする。さらに日韓合併については、「いよいよ朝鮮は日本と一体になり、東洋における指導者の地位にのし上がる」と同時に、その神聖なる使命の一端を敢然として担うことになつたと評価し、日韓合併をきつかけに、「わしたち東洋人はまだまだ真つ赤な血を流さずばなるまい」と、作品内部でも全く論理性が欠けた発言をしている。ほかにも閔妃は大院君が率いた兵によつて殺害され、柳条溝事件は「中国兵の陰謀によつて惹き起こされた」などといったように、作

品の随所に無理矢理の皇国史観に基づいた表現が数多くある。

「海への道」の内容から考察する限り、今まで金史良を高く評価する材料としてよく引用される「太白山脈」に対する林鐘国の『親日文学論』での次のような評価には、はなはだ疑問を抱かざるをえない。

底に流れる郷土にたいする強い感情。だが、ただそれだけである。なまの形の時局的説教もないし、道化じみた日本精神の宣伝もみえない。だから、この長編はたとえ日本語で書かれたにしても、ただちに親日文学であるときめつけるのは困難である。ただ、主人公が金玉均一派だということとが、評者によってどう解釈されるだろうか。むしろ、日本統治末葉に、こうした素材なりスタイルの国語作品も存在しえたことを、ひたすら時局的な発言を事とし、日本精神の宣伝にのみ汲々としていた作家たちと対比して、よい実例としてあげるのが適當であるかもしれない作品である。

「こういう素材なりスタイル」というのは、時局的な問題からある程度自由になりうる歴史的な素材を指すのであろう。同時代を扱えばどうしても時局を避けては通れないところがあるからである。林鐘国が「太白山脈」を「よい実例」として評価したのは、「日本精神の宣伝に汲々」しなくて済む方法が、このような歴史的な素材の選択から可能であることを示したかったであろう。似たような指摘は当時の評論からも窺える。

現下の先鋭な時局的神経に触れないで、割合に今日の問題に触れ得るのは、歴史文学である。しかし、これも今までの所、趙容萬の「船の中」より以外、これと云つたものは現はれてゐないが、今云つた通り、これは割合楽な途であるから、これからはどんな現はれて来ることと思ふ。日清、日露の兩役を背景にした、金玉均、朴泳孝などの活躍から取材すれば、雄大な長編もいくつかは出来上がりさうである。

以上の二つの指摘から見ると、歴史小説という素材は「日本精神の宣伝に汲々」することなく、「時局的神経に触れない」で書ける「割合楽な途」であったと言える。まさにそういう素材選択の問題として林鐘国は「太白山脈」を「よい実例」として高く評価したのである。しかし、「海への歌」はこういう可能性を全く裏切ったかたちでなされた作品である。「太白山脈」と同じ時代背景と人物設定で書かれたこの小説は、林鐘国の評価とは逆に、徹底的に時局的内容として「日本精神の宣伝に汲々」しているからである。「時局的神経に触れない」で「割合楽」に書ける素材でありながら、時局的な内容で塗りつぶされていることを考えると、林鐘国が「よい実例」としてあげた評価にははなはだ疑問である。「海への歌」と「太白山脈」との作品構造や時代背景、また人物設定においての類似性を考えると、「太白山脈」の中絶された第二部がどういふふう展開するかは「海への歌」からも充分推測できるからである。

ここで一つの問題として提起しておきたいのは、親日文学の解釈をめぐることである。それは従来なされた通り、何を言い、どういうことを考え、どのような行動を取ったかを詮索するものではなく、どういう形で表現したかに重点を置いて論じなければならぬということである。つまり、親日と親日文学は別の次元の問題で、また、たとえ作家の表現といつても、それをそのまま作家思想の対象として全面的に論じるのは非常に危険であるということである。とくに強制的な側面が強い朝鮮人作家の親日文学を論じる時には、作家が自分の文学意識とは関係なく、一種の義務として表現していることが多いからである。ここで、一つ判断の基準として考えられるのが、作品において作家の想像性、または作品と作家、あるいは読者との密着性の度合いの問題である。たとえば、強制度の強い時局演説や随筆、軍視察のルポなどは、作者の想像性が抹殺された、個性のない千編一律的なもので、そこには作者、作品、読者との密着の度合いが非常に薄い。また、詩や小説の場合も、日韓融合と出征を千編一律的に唱える個性のない作品は、それ自体が一つの宣戦ポスターに近いものになり、文学作品として全面的に取り上げて作家の国策の度合いを論じていくのは、あまりにも危険である。親日文学を論じる時には、そこに書かれている言葉ではなく、作品と作家との密着性や想像性を重視する必要がある。その意味で、「海への歌」は、宣伝ポスターに近い氏の『海軍行』や、林鐘国の『親日文学論』で挙げられた多くの同策的な言説とは性格を全く異にしているといえる。「海への歌」は、他のいわゆる親日文学と言われる作品にはあまり見か

けられないほど作者の豊かな創造性と作者と作品の強烈な密着の度合いまで感じられることから、親日・国策文学の類型の中でもあまり類例がないもののように思われる。

今までの金史良論においてはこういう側面はほとんど看過され、芥川賞による日本文壇への華々しい登場や、延安抗日地区への脱出と朝鮮戦争への人民軍としての従軍と戦死が、彼の文学思想の揺るぎない根拠として、一つの神話的な像を造り上げるまでになったのである。その結果、以前の親日的な言説といえる『海軍行』『ナルバラム』などの作品や、国策文学においても重大な意味をもつ『海への歌』でさえも、全く無視されるか、あるいは延安脱出のための偽装転向というかたちで解釈されるまでに至ったのである。こういう政治的な結果からの類推は、かえって金史良文学をタブー化するかたちで、その像を曖昧にし、また、親日文学を論じる際にも甚だ不公平な結果をもたらしたのである。たとえば、林鐘国の『親日文学』では、李石薫（創氏名、牧洋）の『善霊』（『国民文学』1944）を取り上げ、親日文学者の自画像である主人公が、国策に疑問をもち大きく動揺していることを指摘し、その理由として、

この答えは、この作品の著作年代が説明してくれる。四四年五月、『国民文学』に発表した『善霊』は、すでに理性を失ってしまった親日派たちの自画像であった。アツツ島玉碎という深まりゆく敗戦の陰影に、かれの神経はいらだっていた。かれがあゆんできた道について、自己嫌悪にとられ、また、かれらが関係した団体について懐疑をいだ

きだしたのだった。⁽¹⁶⁾

と、主人公の国策に対する動揺と懐疑のことを、戦局の不利による時代的な状況から考察し、批判している。戦局の不利から主人公の朴泰民は、「どこへいけばこの身が安全だろうか」と思い、「満州へ逃げだしてしまつた」と指摘する。こういう戦局の論理からすれば、牧洋（李石蕙）の「善霊」が発表された四四年五月（付記）によると三月完成からさらに半年以上も経つた時点の、四四年十月初旬までに連載された「海への歌」では、牧洋（李石蕙）の自画像である朴泰民のような懐疑さえ見せていないことになる。さらに、金史良文学の中でも特筆すべき延安抗日地区への脱出がなされたのは、四五年五月の終わり頃で、すでにこの時期なると硫黄島守備隊の全滅、東京帝国大学でドイツ文学を専攻した金史良が日本の敗戦を予測するのは、そう難しくはなかつたと思われる。彼が延安の抗日地区に脱出したのは、まさにこのような敗戦間近で、となると、林鐘国が牧洋を批判した時局不利の論理は、その表面的な状況から見ると、金史良により当てはまるのである。しかし、従来の金史良論は、抗日地区への脱出という政治的な結果が先走り、朝鮮文壇のほとんどのいわゆる親日文学者や日本で活躍した張赫宙とを比較し、それらの醜態ぶりを批判する材料として、その像は作品を離れて大きく肥大化した感を否めない。韓国の評論家金允植が、金史良文学の神話を「いわゆる新日本文学会側の愚像」とみなし、「進歩的な日本文人側と在日朝鮮人一世」の共通した「自

己同一視化」の対象として、または日本語の創作においての「在日一世たちの最後の拠点確保の試練」の問題として把握したのは、まさにこの点を指摘してのことであろう。

さて、本論にもどって引きつづき『作品に描かれた東学の性格を考察してみると、まずなによりも、「海への歌」の持つこのような国策的な要素は、そこに描かれた東学の性格にもそのまま影響しているように思われる。作品では東学に関わる中心的な登場人物たちが、東学の歴史的な意義を長く説明した部分がある。

こうした社会の動向を象徴するうつつの事件が、いわば東学の乱であった。さらにいえば東学の乱こそはまことにこの国の歴史はじまって以来の、大規模な動乱と呼ぶにふさわしいものであった。そしてこれは、いまや耐えるだけ耐え、忍ぶだけ忍び、もうこれ以上は後へ退くことができぬという逆境にあつて、虐政のもとで呻吟をつづけた民衆が、いっせいに武器を手にして立ち上がった点でも、希有のできごとといえた。

以前の作品にみられるような、民衆をたぶらかす邪教的な性格の東学像はなくなり、民衆が虐政に抵抗して立ち上がったものとして、東学の歴史的な意味が高く評価されている。しかし、虐政に立ち向かう民衆の意志は評価しながらも、その運動時期を間違つたことには、次のように批判している。

国を建て直そうとした東学軍の志と情熱は、立派といえるものであった。しかし、それにしても哀しむべきことであった。彼らに時勢と世界的情勢を展望するだけの力がこれっぽっちもなかったとは。

「太白山脈」では、東学を政治的な力という肯定的な面と民衆を眩惑する邪教的な側面に分けていたが、ここでは、「太白山脈」でみられたような東学の邪教的な性格は、全く抜け落ちている。そして、作品のおもな登場人物たちもこうした変化した東学像のうえに設定されている。国を守るために中別将と契りを結んだベコビが東学軍に加わったことを聞いた中別将は、「国の政治を立て直そうとする行為が、かえってこの国を滅亡の深淵に追いやる」と言って、東学に走ったベコビを強く批判し、白らは村人を集めて平壤城の戦いに参加し、日本軍の味方になって清国軍と戦う。

一方、もう一人の友人弥勒も、中別将と同じ理由で、東学軍に加わったベコビと一戦を交え、最後にはベコビの死を見届けることになる。その後、さらに弥勒は国を守るために日清戦争の際には日本軍に従軍し、勝利の喇叭と万歳の声を聞きながら壮烈な死を遂げることになる。一方、東学軍に参加したベコビは清国軍が出兵したことを聞いて、死ぬ間際には東学軍に加担した自身の非を全面的に認め、「民衆の刃」による死を願う。民衆のために、民衆を味方にして戦ったはずのベコビが、どのような理由で民衆の刃による死を願わなければならないのか、その心理的過程のことはほとんど説明されていない。単に

東学が時期を間違ったことと、国を守るため清国と戦わず日本軍と戦ったことが「一代の不覚」で、それが死に値するというふうに描かれている。そして全体的には全く支離滅裂な筋である。

このように、「海への歌」では「草深し」以来の白々教事件の影から抜け出て、東学のもつ本来の歴史的な評価を試みてはいるが、その評価はごく限られた部分でしかなされていない。東学の歴史的な意義をあまりにも強調すると、東学が外国勢力の排除を目的に日本軍と戦っている事実があるから、それへの評価は国策に反するものになってしまう。つまり、東学は朝鮮王朝の腐敗と秕政を強調するためなら一定の評価を与えてもいいが、東学の持つ反目的な側面は国策の視点からは批判されなければならないのである。ここで大きな葛藤と矛盾が生じてくる。それは東学を評価したい金史良自身の歴史認識と、東学を評価してはいけない時代的な要求で、それが結果として、東学を評価しながらもまたそれを否定する矛盾に到らしたと思われる。以前の白々教事件から冷静さを取り戻し、東学に対する新たな評価を試みようとしたが、それがさらに国策論理によって押しつぶされるかたちになったと思われる。そのような作家の内面と時代との葛藤が、東学を評価しながらも否定する大きな矛盾を抱かせたと思われる。そして、このような矛盾は、そのまま作品内部構造に影響し、作品自体をも破壊させているのかのように思われる。

以上、金史良文学に現れた白々教事件の影を白々教事件発覚前後の作品から考察してみたが、白々教事件前に書かれた「山寺吟」「土城廓」に描かれた東学や東学系類似宗教への認識と事件以降の「草深し」「太白山脈」「海への歌」に描かれた認識との間には大きな違いが認められる。「山寺吟」「土城廓」では、東学や東学系類似宗教が長閑な田園の風景を描写する一つの素材として、または植民地政策を告発する素材として使われており、それ自体への批判はほとんどなされていない。むしろ好感さえ感じられる。こういう好意的な態度は白々教事件後まもなく書かれた「草深し」にいたると大きく変化する。白々教事件を境に東学や東学系類似宗教の認識は急変し、嫌悪と怒りの対象になったのである。それをもっとも激しく表現したのが「草深し」であるが、白々教事件をきっかけにして類似宗教への批判と嫌悪は東学や東学系類似宗教全体へ広がり、それ以降の作品に大きくその影を落とすことになる。

「草深し」から約一年半経ってから書かれた「太白山脈」では、東学を描く際に、白々教事件の影が強く投影され、東学と白々教が同様の宗教のように扱われている。そのためか、東学を描く際に、時代背景の錯誤や東学の性格に対する間違った記述がしばしば見受けられる。しかし、作品の終わり近くになつて、東学への好意的な評価も加わるが、これはかえって作品全体に不統一をもたらす結果になつてしまう。一方、「海への歌」での東学像は、基本的には「太白山脈」の終わり近くでなされ

た変化した東学像を継ぐもので、そこには以前のような白々教の影は全く見受けられなく、東学の歴史的な意味が新たに模索された。しかし、そのような新たな試みは、戦争末期の国策の論理によって大きく歪められ、東学を評価しながらも否定する自己矛盾を露呈してしまふ。

注

- (1) 「草深し」と白々教事件については、拙稿「金史良文学に現れた白々教事件の影——「草深し」を中心に据えて——」（『稿本近代文学』第二十二集、一九九七年十二月）を参照されたい。
- (2) 一九〇七年発令の保安法や一九一〇年八月警務総監部令「集会取締ニ関スル件」により、「天道教、侍天教、善天教など七〇近くのにぼるいわゆる類似宗教、新興宗教は公認の宗教とされず、宗教類似団体の結社として」厳重な取り締まりの対象になったという（韓暎曠『日本の朝鮮支配と宗教政策』未來社、一九八八年）。本稿での類似宗教の意味はこれらの定義によるものである。なお、嶺山教系列の類似宗教も一般的に使う場合には東学系類似宗教として扱い、区別の必要がある時には略称系類似宗教として表記した。

- (3) 「土城廓」は一九三六年「堤防」二号に最初発表され、後に『文芸首都』一九四〇年二月に改作発表され、更に第一創作集「光の中に」、理論社刊『金史良作品集』、『金史良全集』（河出書房新社）に収録されたが、いずれの作品集も『文芸首都』所収の「土城廓」を底本にしている。「堤防」所収の「土城廓」は入手困難のため、その全体は確認していないが、その構成の異同は任展慈の紹介によつて（『金史良全集』一の「土城廓」の解題。氏はその異同を三箇所取り上げている）窺い知ることができる。また、ソウルで出版されたキム・ゼナム『金史良作品集 従軍記』（サルリムト、一九九二年）には、北朝鮮の文芸出版社から刊行した『金史良作品集』の中の「土城廓」が転載されており、その中には任展慈によって指摘された三箇所も入つて

いるが、その位置が任展慧が指摘したところとは違うところに入っている、北朝鮮版「土城廊」が何を底本にして訳されたか全く窺い知ることができない。韓国で出版されている「土城廊」はほとんどこの北朝鮮版の「土城廊」をそのまま転載しているが、おもに改作されたところは、任展慧が考察したように、「日本人の存在を描いた個所が、改削されもしくは欠落」したことで、それ以外の異同はほとんどない。とくに本稿で扱う上帝教に関する記述は、検閲に関わる素材でもないことから、『堤防』と『文芸首都』の間の異同はあまりなかったと思われる。

- 一方、佐賀高等二年次に書いた「土城廊」と『堤防』所収の「土城廊」との異同は、草稿が見つからない現在では確認しようがないが、沢開進の記憶によると（『金史良の学生時代』、『図書』、一九七二年四月号）、「堤防」に「土城廊」を出す前に、金史良からその草稿の校正を頼まれたが、「日本語として、おかしいところがあった」ので、「このまま出し給え」とすすめたという。また、白川豊も「内容上はこの初出が佐賀・学年時の草稿とほぼ同一」のものとして考察している（『白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」』、『朝鮮学報』第一四七輯、一九九三年四月）。
- (4) 磯貝治良「始源の光―金史良論」、『始源の光、在日朝鮮人文学論』創樹社、一九七九年）には、「朝鮮の民衆像が強烈に活写」されたという指摘がある。
- (5) 村山智順「朝鮮の類似宗教」（朝鮮総督府編、国書刊行会、一九七二年）

- (6) 「白々教事件論告文」（『朝光』一九四〇年五月、朝鮮語）
- (7) 呉知泳・梶村秀樹訳注『東学史―朝鮮民衆運動の記録』（東洋文庫、一九七〇年）を参照。
- (8) 林鍾国・大村益夫訳『親日文学論』（高麗書林、一九七六年）
- (9) 兪鎮午「主題から見た朝鮮の国民文学」（『朝鮮』、一九四二年十月）
- (10) 注（8）に同じ。
- (11) 金允植『韓日文学の関連様相』（『志往』、一九七四年、ソウル）

〈付記〉本論文は、一九九八年度筑波大学文芸・言語研究科の博士論文の一部として書かれたものである。

（ナン ブジン 日本学術振興会 外国人特別研究員）